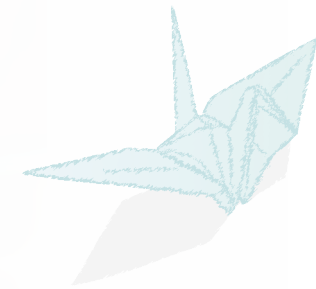


記憶に刻まれた戦争



喜納トヨさんの証言

沖縄戦では、多くの住民が壕での生活を余儀なくされました。激しい戦闘の中、家族で支え合いながら幾度も壕を移動し、生死の狭間を生き抜いた体験があります。当時14歳だった女性が語る戦争は、日常をどのように変え、人々にどれほど深い傷を残したのかが見えてきます。

喜納トヨさん(94歳)

1930(昭和5)年、字真栄平で大城家の長女として生まれる。戦後、18歳で結婚し、夫とともに農業を営み、5人の子宝に恵まれる。現在は孫5人、ひ孫5人にまで恵まれ、週に2度のデイサービスを楽しみに生活する。

近づく沖縄戦

私の家族は父、母、妹2人、弟2人の7人で、両親は農業をやっていた。芋とキビを育てながら、オトーは警防団にも入っていた。

戦争が近づく、住民は屋敷に穴を掘って屋敷壕を作った。ここに味噌や塩、米など保存できる食べものを保管していた。オトーはころ兵隊にとられてしまった。

昭和20年3月23日は真壁国民学校の卒業式前日で、行演習の予定だったけど、空襲警報が鳴ったから途中で家に帰らされた。この日から壕での生活が始まった。

壕での避難生活

最初に避難したのは、集落のはずれにあるアギルンという場所の壕だった。ここは大きくて、7家族くらいが避難していた。食料は屋敷壕にあったから、オカーが家に戻って料理して、壕まで持つ

てきてくれた。私たち子どもはずっと壕の中にいて、私が幼い妹たちのお世話をしてた。2か月くらいこんな生活をしてたけど、ある日米軍の攻撃で壕が使えなくなってしまったから、みんな次の避難壕を探したわけよ。

戻った。

生死を分けたウフヤマ

集落南の、ウフヤマという大きな岩があるところに壕が4つあったから、どれかに入ろうとした。すると、壕の側に汲んだ水を溜めておくカーミ(水瓶)みたいな、黒くて丸いものがあった。どうしてここにあるんだろうと思った「あれは死んだ人だよと教えられた。死体を間近に見るのは初めてだったからびびくりしたが、同時に、

みんな戦争でいつか死ぬんだって思った。

ウフヤマの壕には、私たちともう1家族が入った。だけど、ここも攻撃で崩れてしまつて、すぐに出ないといけなくなった。隣の壕に行く

と、既に3家族が入っていて、これから集団自決すると言っていた。私たち家族も、米軍の捕虜になるくらいなら死んだ方がいいと思って、「一緒に死なせてくれ」って頼んだわけ。するとそのスー(お父さん)が、「手りゅう弾は2つしかない。あんたらと一緒に死に損なう」と言つて、入れてもらえなかった。このときはもう、みんな死ぬと思つてから「私たちも命は惜しくない」と何度もお願いしたけど、だめだった。

さらに隣の壕に行ったら、ここでも「いっぱいだから入れない」と言われた。でも行くあてもないさーね。「入り口でいい」と頼むと、中にいたハワイ帰りのお父さんに「晩はここで過ごして、明日の朝

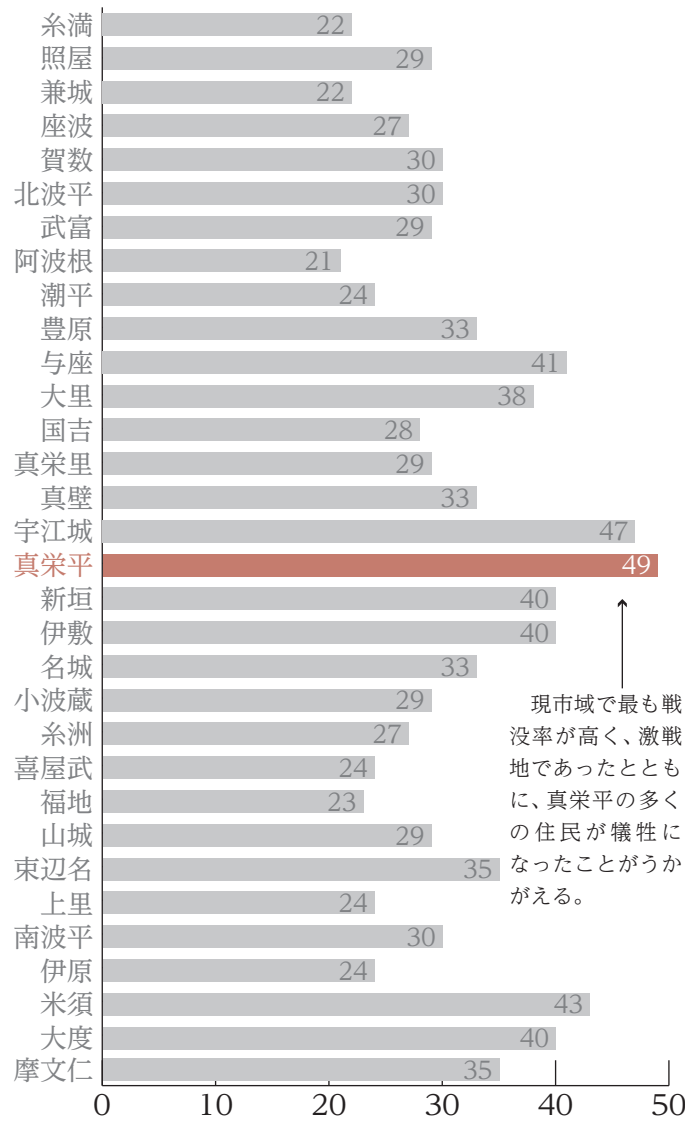


▲数年前のウフヤマ。現在は真栄平の住民によって、きれいに整備がなされた。

戦後の生活と今の思い

6月23日からはね、「戦争は終わったから出てこい」って、スピーカーから米軍の放送が流れていた。でもね、私はそのころ、日本軍が真栄平の人を虐殺したという話を聞いていたから、外に出るのが怖かった。なかなか出

字別の戦没率(%)



過去の証言と糸満市史

沖縄戦における糸満市の情報は、『糸満市史資料編7 戦時資料上巻』『同下巻』で詳しく紹介しています。また、広報いとまんどでは、慰霊の日にあわせて戦争体験者の証言を掲載しています。過去の記事は2次元コードから確認できます。



過去の記事はこちらから